



2020 (令和二) 年8月8日 (土)

# 藤 棚

第382号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>  
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 日本は大国であるとの自覚に立って自らの明日を 構築せよ

校長 小川 義男

学校が発行する各種の文書は、生徒諸君に向けて書かれているスタイルをとりながら、実は、保護者の皆様にもぜひお読みいただきたいのである。だから、諸君が読み終わったら、必ず保護者の皆様にお渡し願いたい。諸君、よろしく願います。

日本の領土は必ずしも広くはないが、その領海、排他的経済水域は極めて広大である。

日本には約 6000 の島々がある。例えば、尖閣諸島は、紛れもなく日本固有の領土であるが、国連の調査で、あの海域に莫大な量の石油が埋蔵されていることが分かった。その埋蔵量は、イラクのそれに匹敵するというのだから凄い。今日、中国が、尖閣諸島及びその周辺海域に対する領有権を主張しているが、これが国際社会の現実だと言えるのであろう。

かつて世界各地、特にアフリカなどは、白人列強諸国の帝国主義的領土拡張政策によってずたずたに引き裂かれた。

領土は大雑把に言って、海岸線から 12 海里が領海である。1 海里は 1.852 キロメートルだから、12 海里は、22.224 キロメートルとなる。この範囲は、領海だから、まあ日本の領土そのものと同じだと言って良い。さらにその外側に排他的経済水域が広がる。これも大雑把に言えば、海岸線から 200 海里以内が、この排他的経済水域に該当する。ほぼ 370.4 キロメートルとなる。仮に岩礁一つが島と認定されれば、その領海、排他的経済水域は約 43 万平方キロメートルである。

尖閣諸島周辺の領海、および排他的経済水域においては、水産資源、海底の埋蔵資源等、全てが日本に帰属するということになる。莫大な資源産出の可能性がここに潜んでいる。

「なんだ。海底や水産資源か。」と、諸君は思うかもしれないが、実はこの水産資源、海底資源が、国家に莫大な利益を供給する可能性がある。

海底にはどんな「宝」が潜んでいるか分からない。日本海の排他的経済水域を、北朝鮮や中国の密漁船が脅かし、イカやサンマその他の漁業資源を盗み取っている。以前、北朝鮮の不審船が、海上保安庁の巡視船と交戦の末に沈没した事件が起きた。当時の小泉純一郎首相は、これを引き上げ、横浜の資料館に陳列した。国際社会とは、どれほど危険な世界であるかを知るために、是非、見学することをお勧めしたい。帰りに横浜中華街に立ち寄るのも良いのではないか。

日本の領海および排他的経済水域を合わせた面積は、世界第6位である。まさに大国と呼ぶのに相応しい。

諸君は、海や海底の持つ可能性を忘れがちであるのかもしれないが、今や世界において、海や海底が、大きな関心の対象となっているのである。

マンガン団塊というものがある。日本周辺の深海底に莫大に存在するジャガイモ状の、まあ、「石ころ」である。

このマンガン団塊は、どうして形成されたのか未だ解明されていない。ジャガイモ状のマンガン、鉄、銅、ニッケル等の金属を多量に含む塊である。ただし、深海底に存在するので、今すぐに取り出すというわけにはいかない。これを取り出すことができるようになれば、日本は資源大国に発展する可能性もある。

また、周辺の海域に、多量に存在することは確実なのだが、メタンハイドレートというものもある。深海底に潜むメタンガスのシャーベット状のエネルギー源である。これも、現在の世界の科学技術では、直ちに取り出すということが出来ない。

しかし、諸君は、日本が深海に潜水する技術において、世界のトップクラスであることをご存じだろうか。これらの研究の背景には、このような海底資源に対する、我が国家の、大きな関心が存在しているのだと、私は考えている。

技術の進歩に伴って、これらを安全、確実に取り出すことが出来るようになれば、それが、我が国にどれほど大きな利益をもたらす可能性があるかは、計り知れない。

小笠原諸島の最南端、南鳥島の海底には、莫大な量のレアアースが存在することが明らかになった。私の知る限りでは、レアアースは、自動車生産になくてはならないものだそうである。かつてそれは、中国のみで産出すると言われた。中国はなかなか「シッカリした」国なので、レアアースの値段を極めて高価につり上げた。そのとき私は、なんとも暗い気持ちになったものである。南鳥島海底のレアアースを実際に採取できるようになれば、我が国にどれほどの経済的影響があるかと想像すると、私は嬉しいような気持ちになる。島が、どれほど大切なものか、諸君も分かってくれるだろう。

地球上の海は、陸の二倍半ある。地上に比べて、埋蔵されている資源の調査やその採取方法など、まだまだ十分に発達してはいないが、世界の大国は、資源を求めて、陸から海に目を転じつつあるのではないかと、私は考える。こういう言葉を用いるのは我が国で私一人だけだが、私は、大国のこのような海に関する関心の拡大を「海洋帝国主義」と呼ぶことにしている。

海上に点在する 6000 の島々が、将来、日本の生命線となることは間違いない。外国からの侵略から、この 6000 の島々を守ることは容易ではない。領土、領海、排他的経済水域を守るためには、日本の場合、少なくとも 2 隻の航空母艦を保有することが必要なのではないかとと思われる。

防衛的目的に局限された航空母艦の保有をも、「軍国主義」だと捨て呼ぶ人々が、今もこの日本には少なくない。その気持ちもよく分かる。何しろ、日本は第二次世界大戦の主役だったからなあ。

しかし、私は、「では、君たちは、いわゆる純粋に平和的手段のみによって、この 6000 の島々を守り続けることが可能だと本当に考えているのか」と、お尋ねしたいと思う。このような世界第6位の領土、領海、排他的経済水域を守り続ける上で、その法的位置づけを深く考え、日本の国際平和主義を守り続ける法律論、政治論はいかにあるべきか、ということ、諸君には考えてもらいたい。

諸君の、活動すべき分野は数知れずある。法律論、政治論、医学論にとどまらず科学全般、宇宙論等、解明すべきテーマは果てしなく多い。若い諸君でなければ、研究、推進していくことが出来ない諸問題である。偉大なるリーダーとして育って頂きたいと願う。